

今回の登録美術品について

1 所有者：

下記①：個人

下記②，③：個人

2 登録日：令和元年5月14日

3 公開美術館（予定）：

下記①：東京国立近代美術館（東京都千代田区）

下記②：京都国立近代美術館（京都府京都市）

下記③：千葉市美術館（千葉市中央区）

※公開のスケジュールは各館において決定されます。

4 登録美術品の概要：

	登録 番号	美術品の名称	種類	制作時期	員数
①	81	このはなの さく や ひ め 木花之佐久夜毘売	絵画	昭和時代（昭和 28 年（1953））	1 幅
②	82	ふ じ さ ん の ず 富士山之図	絵画	昭和時代（昭和 22 年（1947））	1 点
③	83	かつ せん い きょ ず 葛仙移居図	絵画	大正時代（大正 7 年（1918））	1 幅

【登録番号 81】

作品名：木花之佐久夜毘売^{このはな の さ く や ひ め}

員数：1幅

法量・形状等：紙本^{しほん} 著色^{ちやくしよく}，掛幅装^{かけふくそう}，寸法：174.0 × 74.8 cm

制作時期：昭和時代・昭和28年(1953)

制作者：安田^{やすだ} 鞆彦^{ゆきひこ} (1884—1978)

説明：

本作は、大正から昭和期を代表する日本画家・安田鞆彦の作品である。鞆彦は、日本の伝統美を追求し、深い考証に裏付けられた典雅で華麗な歴史画の名作を数多く残している。

本作も、古事記や日本書紀に登場する女神・木花之佐久夜毘売^{このはな の さ く や ひ め}を主題とする歴史画で、再興第38回日本美術院展に出品された作品である。噴煙をたなびかせる富士山^{にほんびじゅついんてん}を背にし、岩に座した貴婦人風の女人の姿で描かれる。左手に桜をもち、また足元にも桜の枝が描かれる。桜には、セキレイとみられる鳥が一羽とまっている。木花之佐久夜毘売は富士山を神体山とし、富士山本宮浅間大社^{ふじさんほんぐうせんげんたいしや}をはじめ、各地の浅間神社^{まつ}に祀られている。また、その神木は桜である。桜にとまるセキレイは、日本書紀の伊邪那岐命・伊邪那美命^{いざなぎのみこと いざなみのみこと}の国生み神話で夫婦の契りを教える鳥として登場し、安産の女神としても知られる木花之佐久夜毘売のイメージと重なる。これらのモチーフは鞆彦の豊かな学識と考証に裏付けられたものである。また、肥瘦^{ひそう}の少ない洗練された描線や丹念な彩色は、鞆彦の歴史画の特徴をよく示し、清澄で気品ある作品となっている。

なお、画面右下には「安」^{しゅぶんほういん}の朱文方印が据えられ、鞆彦自筆の墨書のある箱を伴う。

本作は、鞆彦の代表作の一つとして学術的価値は高い。

(写真)



【登録番号 82】

作品名： 富士山之図 ふじさんのす

員数： 1点

法量・形状等： 紙本岩彩 しほんがんさい, 額装, 寸法： 116.0 × 91.5 cm

制作時期： 昭和時代・昭和22年(1947)

制作者： 梅原龍三郎 うめはらりゅうざぶろう (1888—1986)

説明：

本作は、明治末から昭和時代を代表する洋画家・梅原龍三郎の作品である。

龍三郎の作品は明るく豊麗で、生命感に満ちあふれた色彩美が特徴である。裸婦や北京の風景の連作、浅間山 あさまやま や富士山等の山々等を主題とし、西洋的志向に東洋的装飾性も加えた龍三郎独特の日本的洋画が模索された。

本作は、戦後、富士を盛んに連作していた時期の作品である。裏面のラベルから、昭和22年に伊豆大仁 いおひと で描かれ、同24年に還暦記念で開催された「梅原龍三郎・安井曾太郎 やすいそうたろう 自選展」(会場：銀座松坂屋)に出品された作品であることがわかる。龍三郎自信の作であったことがうかがえる。

前景に針葉樹の茂みを描き、中景に広がる田畑 か の がわ と狩野川を隔てて連なる山々、遠景中央に雪を頂く巨峰富士を大きく描く。富士の背後には、雲を浮かべた青空 すがすが が広がり、清々しさを感じる。その図様は、本作と同年に制作された《朝陽》(第21回国画会展出品、大原美術館所蔵)と類似し、姉妹作と位置付けられるが、彩色は全体に薄塗りで穏やかである。

龍三郎は、日本の伝統技法や伝統的な色彩の美しさを洋画の表現に取り入れ、色彩の美しさを追求するために和洋こだわりなく素材や画材を柔軟に選択した。日本画で使用する岩絵具 いわえのぐ を油で練って油彩画に導入したり、岩絵具をポリビニル系水溶液等で溶いた「デトランプ」という技法 しじたい を用いたりして数多くの作品を残している。また、支持体にもキャンバスに代わって間合紙 まにあいがみ 等の紙を用いることがあった。

本作もまた、紙を支持体とし、岩絵具を用いて描かれており、龍三郎の制作の特徴をよく備えた作品といえる。

本作は、独自の日本的洋画様式の確立にむけて試行錯誤を重ねた梅原龍三郎の作画態度をよく示す作品の一つであり、学術的価値は高い。

(写 真)



【登録番号 83】

作品名： 葛仙移居図 かつせんいきよず

員数： 1幅

法量・形状等： 絹本 著 色 けんぼんちやくしよく，掛幅装，寸法：188.2 × 70.8 cm

制作時期：大正時代・大正7年(1918)

制作者： 富岡鉄斎 とみおかてつさい (1836—1918)

説明：

明治・大正時代を代表する文人画家・儒学者である富岡鉄斎の作品である。

鉄斎の作画は、博学な知識に裏付けられたもので、画題は多岐にわたる。文人画を基本に、大和絵や狩野派・琳派等様々な絵画様式を用い、奔放な筆致と豊かな色彩で、晩年まで旺盛な創作活動を続け、生涯で一万点以上の作品を残したと言われる。

本作は、中国・晋の時代の道士で、神仙術の大成者である葛洪 かつこう (字は稚川，号は抱朴子 しん，283～343) ほうぼくし が羅浮山 らふせん に居を移す様子を主題とする。中国の古典を典拠としたもので、原典の考証を画に反映する鉄斎の作画姿勢をよく示す。

遠景・中景に陰しい深山を奔放かつ緻密な筆遣いで量感をもって表す。流れ落ちる滝は激しい溪流となって近景に至る。溪流にかかる橋には、牛の背に乗り童子を伴う葛洪が、緩やかに歩みを進め仙境に分け入る様子を細かく丹念に描く。その先には、家屋に葛洪の到着を待つ女人と庭を掃く童子を、また葛洪が歩みを進める道の傍らには靈芝 れいし、家屋手前に鹿と瑞祥 ずいしやう の景物を描く。全体に豊かな色彩が施された仙 境図 せんきやうず の大作である。

画面右上方には、葛洪の著書『抱朴子』外篇・広譬を典拠とする鉄斎自筆の賛文 さんぶん があり、識語に「大正七歳歳戊午桃花節／八十又三齡 鉄斎外史百鍊」とあることから、大正7年、鉄斎83歳の作品であることがわかる。また、同年5月の自筆墨書のある箱を伴う。箱書もまた、葛洪の事績を記す。

《葛仙移居図》は、王蒙 おうもう 《葛稚川移居図》 かつちせんいきよず (北京故宮博物院所蔵) 等、中国ではしばしば描かれてきた伝統的な画題であり、本作もそうした図様をふまえたものといえる。

なお、本作は、制作と同年の大正7年12月刊行『明治大 正書画大観 玄 鉄斎外史題 簽』 だいせん (編纂兼発行者：瀬川光行，発行所：書画大観刊行会) に収載されている。本書の凡例には「現存作家に在りては 予 あらかじ め自選を請ひ」とあることから、本作が鉄斎の自信作の一つであったことがうかがえる。

本作は、氣力に満ちた鉄斎晩年の代表作の一つと位置付けられる作品であり、学術的価値は高い。

(写真)

